

書評

見市雅俊著

『ロンドン』 炎が生んだ世界都市 大火・ペスト・反カソリック』

青柳 かおり

本書は、一六六六年の大火後のロンドン（特にシテイ）の再建を中心に、近代化のパイオニアとしてイギリスが中世から近代へと変化していく過程を明らかにしようとしたものである。はじめに、本書の構成と内容を紹介していきたい。まず、ロンドン大火をめぐって三つの伝説があるという。つまり、(一)大火後の立派な都市計画が実行されなかった、(二)大火の前年にはやったペストが都市改造によって消滅した、(三)大火はカソリック教徒による放火であった、というものである。そして、構成も第一章「ロンドン炎上」に続いて、この伝説の順番にしたがっている。第一章では、ロンドンの街区においては、西部は上流階級が住んでおり煉瓦づくりの家が多いが、東部は貧困者の木造が圧倒的に多かったこと、さらにロンドン大火の経過や明暦の大火と

の比較が説明される。

第二章「シテイ再建—商都が帝都か—」では、まず、いくつかあった都市計画のひとつを立案したジェントリ、ジョン・イーヴリン (John Evelyn) が紹介される。彼は、道が狭くおそまつな家が密集しているロンドンに対して、パリ（大陸の都市）は石づくりで壮麗、計画性があると考えていた。そして、当時イギリスではエネルギーが木から石炭へ移っており、煙害がひどかったため、イーヴリンやクリストファ・レン (Christopher Wren) は公害産業の移転を訴え、イタリアをモデルにした再建プランを国王に提出し、国王も同意した。しかし、大火後のロンドンには煉瓦づくりの街に転換した点は成功したが、基本的な構造は変わらなかった。ロンドンには早熟な都市改造ゆえに、中世にはなかった快適さとともに、前工業化社会ののどかさも持つこととなった。

ところで、王権の望む都市計画が実現しなかったのは、内乱で大陸風絶対王政の可能性がなくなっていたからとされているが、やや裏付けが不足しているように思われる。また、著者はイギリスの近代化には前例がなかったことを強調するが、王権側の近代的都市計画案はパリやイタリア諸都市がモデルであり、少なくとも都市計画については近代の見本があったのではないだろうか。

第三章「ペストの終焉」では、まずペストの世界史が概観される。ペストの原因をヒト・モノが運んでくると考えられていたため、一四世紀後半からイタリヤ諸都市では患者を自宅に隔離しており、イギリスでも王権主導で隔離が嚴重に行われていたという。一方、一般民衆はあいかわず、流行病対策の風習としてかがり火の火によって空気を浄化しようとしていた。ダニエル・デフォー(Daniel Defoe)

によれば、大火自身ではなく、大火後に、木造から煉瓦づくりに街が変わったので、ペストは消滅し、快適な都市になったというが、ペスト消滅の因果関係は明らかになっていないようである。

次に第四章「反カソリシズムの炎」に移る。大火はシテイのパン屋から出火したのであるが、当初は外国人のフランス人とオランダ人が放火したと真つ先に疑われていた。また、非国教徒のセクトも疑われたが、オランダに友好的な議会による放火調査委員会の報告書では、不審者はカソリックであり、国際カソリシズム運動が影で糸をひいているとされた。次に反カソリック感情の例として、一六世紀にカソリック的な十字架塔が解体されたことが述べられ、一六〇五年一月五日の火薬陰謀事件のいきさつと、一五八〇年代から記念日などに都市ではかがり火を燃やして祝ったことが説明される。また、当時の著作などによれば、イエズス会士はローマ教皇の放火部隊であるとみなされていた。

一六七八年にはイエズス会士による国王暗殺を図った陰謀事件についての証言があった。このように、とりわけ名譽革命以前にはカソリシズムの恐怖が広まっていたが、近代イングランドの国民意識は、反カソリシズムを最大の契機として生成していったと述べられている。

さて、本書は、「近代イギリス史全体について新しいイメージを描こうとする試み」であるという。特に日本にとつては、一七世紀の二つの革命を経験した近代国家としてのイギリス、議会主権を確立したイギリスというイメージがあるが、本書ではイギリスは前例のない近代のパイオニアであったために、古い伝統もひきずることとなった点が強調されているのである。しかし、イギリスが至った「近代」とはどのようなものなのかは提示されていない。また、内容が多岐にわたり、全体的に話がとんで流れのわかりづらいところがみうけられた。本書は、一七世紀イギリスの重要性を示しているだけではなく、都市生活についての興味深い著作である。もし評者の読み違えや誤解があればご容赦いただきたい。

(見市雅俊著『ロンドンⅡ炎が生んだ世界都市 大火・ペスト・反カソリック』講談社選書メチエ、一九九九年六月、A五判、二七〇頁、定価一六〇〇円)

(本学文学研究科史学専攻博士課程後期)